

# 注視すべき 日常の言葉遣い

ジャーナリスト  
海部 隆太郎

複雑で時には怪奇としか思えない

ヒト・モノ・カネの動きを追い、

そこで発生する出来事を調べ、複数

の人から話を聞き、読み物として

まとめ上げる。それを生業として

きた。その結果を世の中に送り出す

文章は、確かな根拠、事実をベース

に分かりやすさを重視することが

基本。とはいえ原稿が出来上がる

までのプロセスが常に順調という

わけにはいかない。

根掘り葉掘り、しつこく念を押

しながら話を聞く時がある。こう

いう場合の取材先は、その内容に

触れてほしくないことが多く、相

手に不快感を与えていると思いつ

つ質問を連発する。

同じようなことを記者会見でよ

く見かけた。鋭い質問ではなく、

嫌がらせ、揚げ足取りとしか思え

ない記者の質問であり、もうこれ

は東京都が条例化を目指すカス

ハラに該当するのではと感じる。

真実を知る権利とその乱用を問題

意識とするマスコミは少ないが、

議論するべきと私は思う。

先日、編集者との打ち合わせで

「きれいなお姉さんから依頼された

ら断れない」と話すと「それ、セ

クハラと感じる人がいますから」と

ビシツと注意された。なぜと説明

を聞いても半分しか理解できな

かったが、嫌がる人がいるのなら

気を付けるしかなく、とにかく性

別容姿を表現する言葉は使わない

ことを肝に銘じた。

## 時には不正確な言葉も見逃せ

それでも「おやじギャグ」が通

用すると思っている中高年は少な

くない。私もその一人だった。場  
を盛り上げるため、ユーモアの  
環だから、などの理由も今では受  
け入れられない。とくに多いのが  
女性を蔑視するかと思われる発言。

これは状況判断を誤ったというよ  
りは、日頃から男の上から目線が  
常態化しているだけ。失言は自身  
の本音、猛省すべきだ。

時代が違う、今流の考え方に改  
めろというのは表面的なこと。や  
はり一人一人を思いやる心が根付  
かない限り、セクハラ発言は無く  
ならないのでは。加えて日頃から  
言葉遣いを大切にする姿勢を持つ  
ことだ。偉そうに指南書的な書き  
方をしているが、自らの失敗体験  
で学んだことを伝えているだけ。

話は大幅にそれるが、就職が内  
定した学生たちと懇談する機会が  
あった。学生から「面接試験官の  
質問意図を…」という話の時に、

民間企業なのに「試験官」はおか  
しくないか、官は官吏を指すので  
「面接者」とするべきだと一言文句

を言った。学生からは「ああそう  
ですか」との反応しかなく後味が  
悪かった。正しい言葉遣いを伝え  
ても場をシラケさせただけでしか  
なかった。

日常の言葉遣いを大切にするべ  
きだが、そればかり気にしながら  
生きていくとストレスを増幅させ  
てしまうだろう。正しい言葉を使っ  
ているのかどうかは二の次にして、  
やはり人を大切に思う心を大きく  
していくことを考えていた方がよ  
いと考える。これならストレスは  
激減するし問題を発生させないは  
ずだ。

### 【筆者紹介】

海部隆太郎

(かいべ・りゅうたろう)

法政大学卒。日本工業新聞社、I  
T企業を経てフリー。中小企業  
を中心に企業が抱える幅広い課  
題を取材し、講演・執筆活動を  
展開する。